

日韓中国国際シンポジウム

東京・半蔵門
6月15日

設立から十周年を迎えた国際ハイウェイプロジェクト・日韓トンネル研究会(会長・佐々保雄北海道大学名誉教授)の第十回通常総会が六月十五日、都の会場で開催された。今回は特別企画として「東北アジアの開発と国際ハイウェイ・日韓トンネルの役割」と題して、日韓中国国際シンポジウムが催された。東シヤのアハイウェイ構想については、これまで日側が中心となってきたが、シンポジウムでは韓国、中国代表も参加して、国際ハイウェイと日韓トンネルの意義、表現に向けての問題や可能性などが話し合われた。同構想が世界平和と発展に貢献するもので、協議が一致、さうだ、日本からの技術移転など互恵主義に基づき、コンセンサスありの必要性が強調された。

(レポート・本紙編集部)

午後二時半から行われた日韓中国国際シンポジウムでは、最初に、高橋孝治氏(地下工事コンサルタント)が「日韓トンネルの現状」が「日韓トンネルの現状」について、過去十年間の経過、第二次基本構想の構築などを報告。さうだ、日本、韓国、北朝鮮、中国など、東北アジアにわたる交通の現状と展望に題して報告。人口の約四割が首都ソウルに集中する韓国の交通事情と、全韓の道路整備計画を説明。また、南北間を連結する幹線道路計画に概ね、「南北統一による輸送需要の増加まで考慮して推進すべき」として、南北統一後の北朝鮮を含む道路計画の必要性を訴えた。

想を達成するための一つの方策であるを引用し、「同構想は、胆かつ先見性のあるもので、人類の発展と平和に莫大な貢献をするもの」と期待を表明した。そのうえで、中国内の京丹国際高速道路は東シヤ・ハイウェイの一部であるとして、日韓両国と共に国際ハイウェイ建設に協力する意向を述べた。また、「王麗・国家副首相も非常に関心を寄せている。国際ハイウェイ建設は中国において実現する条件が整っており、自信もある」と強調した。

これに対し、コディネーターを務めた大塚茂氏(日韓トンネル研究会幹事)は、日韓トンネル研究会は、日韓の三国で技術、経済効果、政治的に十分はコンセンサス作りが必要なのは同感。技術格差を縮めることに期待したい。あまも三国の互恵主義に基づいて、前提を進めるべきである」と述べた。



国際ハイウェイ建設
事業団理事長
梶栗玄太郎氏

新段階へ飛躍

理事長あいさつ
梶栗以来十年間、今日まで約百億円の費用を投入し、調査活動を展開してきた。

を行いたい。関係官庁に相談したうえで、まず調査費については自己資金を

今日までの調査研究により、いよいよこれから国民、政府に対して積極的に協力を要する段階に達したのではないかと感じます。したがって、今年から来年にかけて、議員連盟の創設などの国会において特別立法をめざし、具体的には議員一団の第三セクター方式組織を確立していきたいと所存であります。

このプロジェクトが本格的に実現に向かって進行できますように、皆様方の尽力、ご協力をまわりたいと強く次第であります。

大アジア経済圏を創出

「役割」—国際ハイウェイプロジェクト・日韓トンネル研究会—

国際ハイウェイ・日韓トンネル計画は一九八二年一月十日、韓国ソウルで開催された第十四「科学の統一に関する国際会議」(ICS)の席上、文鮮明師によって提唱された。この提唱を受け世界平和教授アカデミーの故松正寿会長(元立教大学総長)が中心となって日韓トンネル研究プロジェクト総括委員会が発足した。この委員会が提出した報告書「日韓トンネル研究プロジェクト・第一次基構想」予備調査分析報告書に基づき一九八三年五月二十四日、国際ハイウェイプロジェクト・日韓トンネル研究会が発足した。

会長は、終始青島トンネル計画の地質顧問を務めた北海道大学名誉教授の佐々保雄先生が就任された。

発足時から昨年六月までの約九ヶ月間は、第一部会(政策・理念)、第二部会(地形・地質)、第三部会(設計・施工)、第四部会(気象・海象)の四つの調査研究部会が構成され、研究会の組織を中心として活動してきました。しかし、

国際的、社会的、経済的諸条件に対応して研究活動の一層の展開を図るため、昨六月の総会で、組織改革が行われ、現在の研究会組織は総会、理事会、政策委員会、技術委員会が構成された。

日韓トンネルの現状

地下工事コンサルタント(株)顧問
(元鉄道技術研究所室長)

高橋 彦治氏



この新組織の下に、次のような調査研究を実施する予定です。

政策委員会は、基本政策部会、広報部会、資金調達部会、三つの部会が構成され、それぞれの部会において、

具体的な検討がなされています。これらの会では、日韓トンネルの基本構想の構築、国際コンペの開催準備の検討、組織と資金調達のための法整備の調査研究などが行われています。また、技術委員会は、総括部会、建設計画部会、官民共同プロジェクト部会の三つの部会が構成されて各部会が研究を続けています。

総括部会では、今までの約十年間の調査の総括と問題の整理、確認と対応策の検討、建設計画部会では二十一世紀の交通体系のありかた、通信ネットワークシステムの研究が行われ、官民共同プロジェクト部会では文献の収集と整理、共同研究調査、情報交換がなされています。

今後の課題として、検討されるべき項目は、①国際ハイウェイプロジェクト・日韓トンネル計画、②第二次基本構想の構築、③地質技術の調査研究、④対馬海峡、西水道の新期堆積層の解明、⑤その他、となっています。

これらの課題に基づき、各種技術的基礎研究を継続するとともに、国際ハイウェイ・日韓トンネル計画が、日本、韓国、

北朝鮮、中国の東北アジアの環境変化の中で、その役割を明らかにすることが重要であると考えます。

その前提条件として、関係の緊密化を図るとも必要になってきます。

中国における交通の現状と今後の展望

中国国際友好連絡会第一副秘書長
常務理事

蘭 曉 石氏



私の講演は三つの部分から成っています。

わが国の現在の交通運輸は、鉄道、道路、水運、航空及びパイプラインの五つの運輸方式からなる総合運輸システムになっています。

九〇年末の、五の運輸方式の総延長は約一七〇余万キロであり、そのうち鉄道は五・三四万キロ、道路二〇二・八三万キロ、水運一〇九八万キロ、航空五〇・六万キロ、パイプライン一・五九万キロ、五つの運輸方式が受け持

き、五の運輸方式が受け持

つ輸送量から見ると、道路運輸がわが国の総合運輸システムの中で主要なものである、その受け持つ輸送量は億人あるは億人、他の運輸方式の輸送量の三、四倍に達しています。また道路の到達深度、広がり度及びその面的に及ぼす作用は、他の如何なる種類の運輸方式も替わることので

きないものであります。

しかし、現在、どの運輸方式でもその輸送網の密度と技術水準は、共に経済発展と国家に後れを取っており、甚しきはある。

は、(事物に基づき真理を求む)。量力而行(力に応じて実行する)の分劃施行で、第一段階は東アジア国際ハイウェイであり、東アジア国際ハイウェイの一部分であり、これは七〇路、十二万キロの国道を基に、中国首都北京、東北各主要都市を結ぶ幹線道路であり、この道路の完成は、わが国の二つの発達地区の、遼東半島と京津塘経済開発地区及び、中韓三国を緊密に連結するものであります。そしてこの地区内外の物質輸送を中日韓の貿易の繁栄のために優れた条件を創造するものです。

このような事情を考慮に入れ、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

入れる、わが国が第八期五年計画期間に、長江三角州、珠江三角州、遼東半島、山東半島等の経済発展地区に高速度、大交通量、高運輸効率に適合できる、遠距離運輸任務の高等級道路を建設する計画で

- 296 -

役員のおいさつ(要約)



鉄道技術協力会時代には、中国の鉄道、韓国の地下鉄の技術協力にも携わった関係もありまして、本会の副会長をおおせつて考えてみますと、わが国と中国・韓国の関係は歴史的に非常に複雑な問題が政治的にも国民感情の上からもあることは事実であります。しかし今の世界は、冷戦の時代を終え、米ソの超大国が行き詰まり、世界の目はアジアに注がれているのであります。

将来の夢に

元駐海外鉄道技術協力会理事長
瀧山 養氏

私は国鉄時代に佐々会長から青函トンネルの問題につきまして、多大なる指導を頂きました。また海外



意思の疎通を

上田 稔氏
駐日本技術士会会長

私はこの日韓トンネル研究会の顧問をおおせつております。今回、韓国と中国からの来賓を招いて国

プロジェクトの趣旨

一九八二年十一月十日、韓国・ソウルで開催された第十回「科学の統一に関する国際会議(ICUS)」で、主権・国際文化財団・本部・エニョクの席上、世界基督教統一神霊協会(統一教会)の創始者である文鮮明師によって「国際ハイウェイ構想」が提唱され、参加した〇〇名余りの科学者たちによって同構想は採択された。

このプロジェクトは人類の直面する今日の諸問題(飢餓、疾病、戦争)からの解放を目指し、平和と幸福に満ちあふれる理想世界を実現しようとする理念から出発し、二十一世紀における新しい文明社会を創



提唱者の文鮮明師

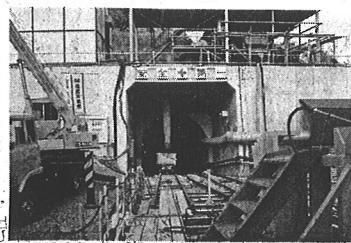
国際ハイウェイ構想

第10回 ICUS 文鮮明師が提唱

ない出入国システムが考えられている。またハイウェイの画例なども一〇の地帯は中立の緩衝地帯を設け、高速乗用車や観光バスを利用する人々のための、かなな生活を営み、世界を旅しながら、自然を愛し、自然から学び、自然の美について神に感謝し、他国の人々のために生き、お互いに愛し合うときが過ぎるようになるであろう」との主旨からなされたものである。

十年間の歩み

この提案を受けて、翌八二年には日本で「国際ハイウェイ建設事業団」が設立。同事業団は、国際ハイウェイ実現の第一歩として、初めて日韓トンネル計画に着手することを決め、トンネルルートとして想定される対馬、喜岐、東松浦半島の地表面積ボーリング調査に、海城部の音波探査などを開始した。



調査坑現場 (佐賀県・鎮西町)

この提案を受けて、翌八二年には日本で「国際ハイウェイ建設事業団」が設立。同事業団は、国際ハイウェイ実現の第一歩として、初めて日韓トンネル計画に着手することを決め、トンネルルートとして想定される対馬、喜岐、東松浦半島の地表面積ボーリング調査に、海城部の音波探査などを開始した。

その後韓国側では、八七年に巨済島の地表面積、八八年秋に巨済島のボーリング調査が開始された。一方、対馬でも、厳原町阿連に調査坑予定地が定められ、八九年七月、地表面積が北アジア開発構想の浮上によってにわかに注目されるようになった本プロジェクトでは、昨年の暮れ、提唱者の文鮮明師の北朝鮮訪問により、もともと難所と目されていたワル・平壤間のルートが、先の南北首脳会談の「合意書」(第十九条……)に盛り込まれた。その後のインフラ整備が急がれる中、

さらに八三年には技術者や有識者からなる「日韓トンネル研究会」を設立。事業団の調査結果に基づいて、最適なルートの選定と施工の検討などを行うことになった。同研究会の会長には、長年、青函トンネルの地質調査に携わってきた佐々保雄・北海道大学名誉教授が就任している。

八六年には、対馬西海岸沖の海洋ボーリング、呼子・喜岐間の渡海測量が実施され、共に十月は、佐賀県松浦郡鎮西町で調査坑の掘削が開始された。また同時期、韓国においても「国際ハイウェイ研究会」(会長、尹世元・前慶熙大学副総長)が設立された。

その後韓国側では、八七年に巨済島の地表面積、八八年秋に巨済島のボーリング調査が開始された。一方、対馬でも、厳原町阿連に調査坑予定地が定められ、八九年七月、地表面積が北アジア開発構想の浮上によってにわかに注目されるようになった本プロジェクトでは、昨年の暮れ、提唱者の文鮮明師の北朝鮮訪問により、もともと難所と目されていたワル・平壤間のルートが、先の南北首脳会談の「合意書」(第十九条……)に盛り込まれた。その後のインフラ整備が急がれる中、

国際ハイウェイ構想の歩み

- 1981年11月 韓国ソウルで開かれた「第10回科学の統一に関する国際会議」の席上、文鮮明師が「国際ハイウェイ構想」を提唱
- 1982 4月 国際ハイウェイ建設事業団設立
- 6月 北九州で地表面積の開始
- 10月 東松浦半島でのボーリング調査の開始
- 日韓トンネル海城部の音波探査の開始
- 1983 5月 日韓トンネル研究会の設立
- 9月 佐賀県鎮西町で電気探査、簡易弾性波探査
- 10月 日韓トンネル海城部の環境調査の開始
- 12月 対馬で重力探査の開始
- 1984 6月 老岐水道で磁気探査の開始
- 8月 老岐水道でボーリング探査開始
- 9月 対馬に微小地震計を設置
- 1985 3月 ソウルで日韓合同会議・報告会
- 12月 12月 対馬海峡西水道で海洋ボーリング実施
- 1986 4月 日韓トンネル調査坑の起工式 (佐賀県東松浦郡鎮西町) 韓国で国際ハイウェイ研究会の設立



調査坑起工式 (1986年10月)

- 1987 4月 名護屋気象観測所の設置 (鎮西町)
- 8月 対馬の浅茅湾で漁業実態調査の開始
- 1988 4月 財団法人「亜細亜技術協力会」日韓トンネル研究専門委員会の発足
- 9月 日韓トンネル調査坑二期工事の開始 (鎮西町)
- 10月 韓国の巨済島でのボーリング調査の開始
- 1989 4月 中国で京丹 (北京-丹東) 国際ハイウェイ計画準備委員会の設立
- 5月 中国ハイウェイの予備調査の開始 (北京-瀋陽-丹東)
- 1990 4月 大阪「国際花と緑の博覧会」で国際ハイウェイを紹介するアニメーションを上映 (～9月) モスクワで開かれた第11回「世界言論人会議」で国際ハイウェイ構想を発表
- 1991 2月 韓国の土木、土質技術者来日
- 8月 「日韓トンネル計画」に関する陳情団派遣 (福岡、佐賀、長崎)
- 1992 3月 韓国で韓日トンネル技術研究会の設立

(提供・国際ハイウェイ建設事業団広報室)